

第三の道とグッド・ソサエティ

—規範的社会経済システム論の系譜—

福 田 敏 浩

本稿は第三の道論とグッド・ソサエティ論を比較考察することを目的としている。筆者の言う第三の道論には既存の二つの社会経済システムを超克し、望ましい第三の社会経済システムを提案しようとする議論と、既存の両社会経済システムの間の中間の道を主張する議論が含まれる。第三の道論の故国はドイツである。時代的にはワイマール共和国に遡る。当時はレッセ・フェール体制の下降と集産主義の台頭という上下二方向の運動が交叉した不安定かつ波乱に富んだ時代であった。そのような時代状況の中でレッセ・フェール体制と集産主義をとともに退け、第三の道を唱道する議論が大量かつ多彩に展開された。名の通った学者で最初に第三の道 (Dritter Weg) という言葉を使ったのは自由社会主義者フランツ・オッペンハイマー (Franz Oppenheimer) であった。ヒトラー (A.Hitler) が政権の座に就いた1933年のことである。以来ドイツ語圏では、また広くヨーロッパでは第三の道という言葉が比較的よく使われるようになった。

グッド・ソサエティ論の故国はアメリカである。政治評論家にして公共哲学者でもあったウォルター・リップマン (Walter Lippmann) は1937年に “*The Good Society*” (London) を出版し、レッセ・フェール体制でもなく、集産主義でもない第三の道を提案した。レッセ・フェール体制が崩壊に瀕し、国家の影が日増しに濃くなっていくドイツと同様の時代状況—もちろん程度は異なるが—の中で自由を擁護しようとしたのである。以来アメリカではグッド・ソサエティという言葉が規範的社会経済システム論の分野でも使われるようになった。とは言え、筆者が ‘Good Society’ というタイトルの付いた書物に限定して調べた限りでは、社会経済システムの問題を正面から扱ったまとまりのあるグッド・ソサエティ

論はそれほど多くない。数の上では第三の道論に遠く及ばないように思われる。しかし、内容的には遜色のない説もある。それらのうちここではリップマンの説とバーリーナー (J.S.Berliner) の説を取り上げてみた。

II ワイマル時代の第三の道論

第一次世界大戦の終結からナチズム政権の登場に至る15年は、ドイツ史上未曾有の受難の時代であった。第一次世界大戦の敗北、巨額の賠償金負担、超ハイパー・インフレーション、世界経済大恐慌、失業の急増、議会制民主主義の機能不全による政治システムの不安定化・弱体化など経済と政治の両面にわたって負の連鎖が連鎖として続いた。第三の道論はそうした連鎖を断ち切り、ドイツを再建するという意図をもって提唱されたのである。

ワイマル時代は第三の道論が噴出した時代なのであるが、一昨年これを対象にした優れた研究書が刊行された。ドイツの若手経済学者マルク・リュダーズ (Marc Lüdders) の手になる *“Die Suche nach einem Dritten Weg, Beiträge der deutschen Nationalökonomie in der Zeit der Weimarer Republik”* (Frankfurt a.M., 2003) である。本書は当時提唱された第三の道論をほぼ網羅しており、その成立事情や各説の概要を知るにはうってつけである。以下、この書に全面的に拠りながら、成立当時の第三の道論を、主要なものに限定して、簡単に見ておこう。なお、整理にさいして筆者はリュダーズの整理の仕方―需給の調整方式による各説の仕分け―と違って思想系譜別の分類基準を置いたことを断っておきたい。

(1) 新自由主義の第三の道

新自由主義が登場したのは1932年である。この年、リュストウ (A.Rüstow) は社会政策学会の大会において新自由主義 (Neuer Liberalismus) の立場を宣言¹⁾し、また「ドイツ自由経済政策同盟」を結成してリベラルなスタンスをとる学者や政治家や実業家を糾合した。この組織にはリュストウのほかにはオイケン (W.Eucken) やレプケ (W.Röpke) らが参加した。彼らはレッセ・フェール資本主義と集産主

1) Rüstow [23] S.64, 68, 69

義を超克するドイツ新自由主義の道を切り開いた。私有を土台にして権威を回復した強い国家によって市場経済を誘導するというものであった。ナチズム政権の登場とともに亡命したレブケは1937年に‘Dritter Weg’を掲げ、それ以後に出した一連の著作において「経済ヒューマニズム」を設計し、またオイケン²⁾は1940年に公刊した『国民経済学の基礎』をはじめとする一連の著作の中で「競争秩序」を設計した。第二次世界大戦以後、新自由主義の第三の道は西ドイツの経済復興の指針として大きな役割を演じた。

(2) コーポラティズムの第三の道

コーポラティズムは個別経済(市場)と国家との間に位置する中間団体を重視する立場である。個人主義に立つ資本主義と国家主義をベースとする集産主義とともに退け、コルポラツィオンによって編成された経済システムがめざされた。

リュダースはこの方向をとる第三の道論として社会改良主義系の工場共同体論(W.Albrechtら)、カトリック社会論系の連帯主義論(T.Brauer,O.v.Nell-Breuning,G.Gundlachら)、ユニヴァーサリズム系の身分秩序論(O.Spannら)、社会学系の新経済論(W.Rathenau)および共同経済論(W.v.Moellendorf)、労働組合系の経済民主主義論(T.Leipart,F.Naphtaliら)を挙げているが³⁾、ここでは工場共同体論と新経済論を見ておこう。

1. 工場共同体論

工場共同体(Werksgemeinschaft)はアルブレヒト(G.Albrecht)やヴェディゲン(W.Weddigen)やシュタドラー(E.Stadler)やベーム(M.H.Böhm)らによって提唱された⁴⁾。個々の工場や個々の企業を基礎とし、その上に労働共同体を、さらにその上に国民共同体を置くコーポラティブ秩序を建設するというのが眼目であった。生産現場である工場では使用者と雇用者が協働関係の中で協議方式によって業務を遂行する。使用者が指導権をもつが、その見返りに雇用者には雇用が

2) レブケ説およびオイケン説については福田〔9〕および福田〔10〕を参照されたい。

3) Lüdders〔19〕S.135-191

4) Lüdders〔19〕S.141

保証され、利潤参加が認められる。ベームは労使の協議機関として経営評議会を提案した。このような労使協調によって資本主義の宿弊である資本と労働の階級対立が克服され、その結果社会的平和が実現され、同時に高効率が達成されると考えられた。

なお、このコーポラティブ構想では、私有制度のもとで生産の決定権は個別企業に与えられ、個別経済間の需給の調整は市場経済に委ねられることになっていた。

2. 新経済論

ラテナウ (W.Rathenau) は1918年に新経済 (Neue Wirtschaft) の秩序構想を打ち出した。⁵⁾ 企業経営者であり、エンジニアでもあったラテナウは経済秩序を設計台の上で描くことができると考えた。社会工学的立場である。この立場から同種の企業を水平的に組織した職業団体 (Berufsverbände) と前方・後方連関の中にある複数企業を垂直的に組織した業界団体 (Gewerbeverbände) とから成るコーポラティブ秩序を設計した。これらの団体には自主管理権が与えられる。職業団体は株式会社の形を取り、その内部の調整はシンジケートと同様のやり方で行われる。職業団体間の取引は業界団体によって調整される。つまり、業界団体はその境域内で需要、商品調達、価格、納入期限、支払方法などを明示することによって個々の職業団体の間の取引を仲介する。こうして職業団体間の交渉によって需要と供給は事前に調整されると考えられた。市場経済に代えて交渉経済を置くと言うのであるが、所有制度については私有維持が貫かれた。

3. その後のコーポラティズム

リュダーズによればコーポラティズム系の第三の道論が人気を博し、その頂点を極めたのはナチズム政権が登場する直前の1933年であった。⁶⁾ それ以後この系譜の第三の道論とその主張者は弾圧され、影響力を失った。1945年以後のドイツ語圏においても影響力は回復せず、わずかに1960年代の「協調行動」 (konzertierte Aktion、政労使の三者協議による賃金ガイドラインの制定) の論議や1980

5) Lüdders [19] S.171-174

6) Lüdders [19] S.188

年代のネオ・コーポラティズムの論議において短期間注目を集めたにとどまっている。

(3) 社会主義の第三の道

リュダーズの書物の中で社会主義の方向をとる第三の道論に分類されているのは自由社会主義、ナショナリズム系のドイツ社会主義および社会民主主義系の市場社会主義である。⁷⁾

1. 自由社会主義

オッペンハイマーは1933年に第三の道というコンセプトのもとに資本主義でもなく、共産主義でもない自由社会主義 (Liberaler Sozialismus) の秩序構想を提示した。⁸⁾ 彼によれば資本主義におけるプロレタリアは、したがって階級関係は農業セクターに起因する。つまり、地主による土地の占有こそが階級関係の原因であり、地主—労働者の支配従属関係をもたらした。自由 (自由主義) と平等 (社会主義) を保証する社会経済秩序を実現するには、何よりも土地占有を解体し、土地を農業労働者に分配し、彼らを独立自営農民にしなければならない。こうすることによって独立自営農民にはチャンスの平等が与えられ、自由競争が可能となる。そこでの資源配分は市場経済に委ねられる。オッペンハイマーのモデルでは国家は市場経済に対して干渉しないことが想定されていた。リュダーズの言葉を借りるとオッペンハイマーは市場原理主義者であった。⁹⁾ オッペンハイマー説は農業を軸にしており、工業中心・都市中心・資本家—労働者中心の近代社会主義思想の中ではひときわ異彩を放っている。

オッペンハイマーは1933年に日本を経由してアメリカに亡命した。かれの自由社会主義はナチズムの時代はもとより第二次世界大戦後も実現のチャンスをもたなかった。

2. ドイツ社会主義

ドイツ社会主義 (Deutscher Sozialismus) はナショナリストによって唱えられた。¹⁰⁾

7) Lüdders [19] S.193-255

8) Lüdders [19] S.92-103. オッペンハイマー説については福田 [13] を参照されたい。

9) Lüdders [19] S.103

10) Lüdders [19] S.219-241

の代表はゾンバルト (W.Sombart) であったが、かれはドイツ社会主義者を自称し、1934年には文字通り “*Deutscher Sozialismus*” (Berlin) という名の書物を出版した。この系譜の論者にはほかにプロイティガム (H.Bräutigam) やツインマーマン (F.Zimmermann) やエッシュマン (E.W.Eschmann) らがいた。

ドイツ社会主義がめざした経済秩序は計画経済であった。ただし、それはボルシェヴィズム型の中央管理経済ではなく、一種の混合経済であった。私有および市場経済を認め、それらを国家経済 (国有, 国家経済計画) の中に組み込むことが想定されていた。形式的に見ると私有・市場経済 (資本主義) と国有・中央管理経済 (共産主義) の間の道、つまり第三の道であったが、実質的には国家主導の経済運営システムであり、ナチズム (国民社会主義) に近い秩序構想であったと言える。

ナショナリズムに裏打ちされたドイツ社会主義は第二次世界大戦後の西ドイツの学界および政界で拒絶され、影響力を完全に失ってしまった。

3. 社会民主主義

社会民主主義の第三の道論を代表するのはハイマン (E.Heimann) とランダウアー (C.Landauer) ¹¹⁾ である。かれらは1920年代に社会主義における合理的経済計算の不可能論を展開したミーゼス (L.v.Mises) の挑戦に対して応戦し、市場社会主義 (Marktsozialismus) の道を提示した。(ついでながら述べておくと、このコンセプトを最初に使ったのはハイマンである。1922年のことである。¹²⁾) 国有制度 (社会主義) と国家の経済計画のもとで市場価格メカニズムを活用すれば合理的資源配分が可能になるという回答であった。資本主義と共産主義の間をゆく第三の道の提案である。ハイマンやランダウアーの市場と計画の捉え方はプラグマティックであった。市場価格メカニズムと国家の経済計画を経済秩序にとってニュートラルな社会的技術と捉え、経済計画は言うまでもなく市場価格メカニズムも社会主義において利用できると考えられた。

11) Lüdders [19] S.241-255

12) Nuti [21] p.20.ちなみに ‘Marktsozialismus’ の同義語に ‘sozialistische Marktwirtschaft’ があるが、この言葉を最初に使ったのはAlfred Weberであった。1950年のことである。Csikós-Nagy [3] S.387

ハイマンとランダウアーは1933年にアメリカに亡命した。かれらの第三の道はナチズムの時代はもとより1945年以後の（東西）ドイツにおいても実現のチャンスをもたなかつた¹³⁾。

Ⅲ 第二次世界大戦後における第三の道論

（1）戦中・戦後

ワイマール時代のドイツで高まりを見せた第三の道に関する論議はナチズムの登場とともに下火となったが、それでもドイツ国内ではオイケンが弾圧にもめげず「競争秩序」の構想を体系化し、国外にあっては亡命したレプケが「経済ヒューマニズム」の構想を仕上げた。

第二次世界大戦の終結とともに西ドイツでは新自由主義陣営と社会民主主義陣営からそれぞれ戦後復興の経済政策構想として第三の道が打ち出された。ミュラー・アルマック (A.Müller-Armack) の「社会的市場経済」 (Soziale Marktwirtschaft, 1946年) とリツチュル (H.Ritschl) の「自由社会主義」 (Freiheitlicher Sozialismus, 1947年) である。社会的市場経済の構想は西ドイツ時代から今日の統一ドイツに至るまでこの国の経済政策をリードしてきたことは周知のとおりである。またリツチュル説は社会民主主義陣営の混合経済構想に祖型を置いたことで知られる。これらについては別の機会に検討したので詳細はそちらに譲り¹⁴⁾、ここではこれ以上触れないことにする。

（2）1960年代

第三の道論に転機が訪れたのは1960年代である。この時代は国際政治の枠組みが敵対的冷戦から平和共存へと変化し、それを背景にして西側の社会経済システム学界では脱イデオロギー化が進行し、他方ソ連・東欧諸国では現存社会

13) 正確を期しておくとして東ドイツ政府は1989年の東欧革命の渦中において窮余の策として市場社会主義の構想を打ち出し、政権の延命を図った。ただし、手本にしたのはハンガリー・モデルであり、ハイマン/ランダウアー・モデルではなかった。これについては福田〔8〕第2章 (pp.35-55) を参照されたい。

14) ミュラー・アルマック説については福田〔10〕を、リツチュル説については福田〔13〕を参照されたい。

主義システムの改革が一斉に行われた。このような時代状況の中で西側では収斂論が、東側では新マルクス主義の第三の道論が登場した。それまでの第三の道論がほぼドイツ語圏に限られていたのに対し、60年代の論議は国際的スケールに広がった。

収斂論の代表的論者の一人はティンバーゲン (J.Tinbergen) であったが、彼は東西両経済システムの相互接近を例証し、それを踏まえて両者が収束しゆく第三の経済システムとして「最適体制」 (optimum regime) を想定した。私的部門と公的部門、市場経済と国家の経済計画から成る混合経済であった。¹⁵⁾彼の第三の道は資本主義とソ連型社会主義の間をゆく中間の道であった。

収斂論と前後して東欧では新マルクス主義の第三の道論が登場した。新マルクス主義とはマルクス・レーニン主義に対して否定的スタンスをとった東欧における一群の改革派の思想であるが、それらの中で第三の道を提唱したのはチェコスロヴァキアのグループであった。シク (O.Sik) やコスタ (J.Kosta) やセルツキー (R.Selucky) らは公有制度と市場経済から成る市場社会主義を構想した。¹⁶⁾

(3) 1990年代

次に第三の道に関する論議が高まりを見せたのは1990年代であった。この十年は経済システム革命の時代であった。東欧革命とソ連消滅によって社会主義から資本主義へのシステム移行が始動した。このような時代状況の中で左翼は守勢に立たされ、思想の再構築を余儀なくされた。アメリカでは分析的マルクス主義のグループローマー (J.E.Roemer)、バーダン (P.K.Bardhan)、ワイスコフ (T.E.Weisskopf) らが公有制度と市場経済から成る市場社会主義を提唱した。¹⁷⁾資本主義とソ連型社会主義の間の中間の道である。

一方、西欧の社会民主主義陣営ではたとえばイギリスのニュー・レイバーが掲げた 'Third Way' やドイツ社会民主党が打ち出した 'Neue Mitte' というローガンのもとで思想のリニューアルや政治路線の転換が行われた。この系譜のオ

15) ティンバーゲン説については福田 [6] pp.30-40を参照されたい。

16) 筆者はチェコの改革派グループを「移住プラハ学派」と名づけた。この派の市場社会主義論については福田 [6] 第6章 (pp.149-179) を参照されたい。

17) 分析的マルクス主義の市場社会主義論については福田 [7] pp.145-149を参照されたい。

ピニオン・リーダーはイギリスの社会学者ギデンズ (A.Giddens) であるが、その彼は混合経済、参加型市民社会およびポジティブ・ウェルフェア社会から成る第三の道の構想を打ち出した¹⁸⁾。

カトリック社会論系の第三の道論が体系的かつ具体的な形をとって登場したのも1990年代であった。野尻武敏博士は自然法（新トマス主義）の立場から資本主義と社会主義を超克する、つまり近代を超克する構想を提示した。市場経済、公共経済および社会経済から成る三重の社会経済システムである¹⁹⁾。

IV リップマンのグッド・ソサエティ論

次にリップマンのグッド・ソサエティ論を見ることにしよう。ここでは1937年に出了た“*The Good Society*”とそれに先立つ三年前の1934年に公刊された“*The Method of Freedom*” (London) に拠りながら、社会経済システムに関する議論に限定して、リップマン説の特徴を捉えてみよう。

ベラー (R.N.Bellah) らによると、リップマンのグッド・ソサエティ論に対して大きな影響を与えたのはイギリスの政治学者ウォラス (G.Wallas) によって1914年に出版された“*The Great Society : A Psychological Analysis*” (New York) であった²⁰⁾。この書は、欧米の近代というのは交換経済と分業の拡大によって個人や地域や国の各レベルで旧来の自給システムが崩れ、国内の各レベル間で、さらには国際間のレベルでいわば相互依存のネットワークが形成されるようになり、生産力が飛躍的に向上した時代であることを述べたものであった。自給社会からその殻を突き破った大きな社会への転換であり、今日の言葉で言えば市場社会への移行である。リップマンはこのようなウォレスの社会観に立脚しながらグッド・ソサエティを追究する。と言っても、グレート・ソサエティを礼賛したわけではなく、一方で「グレート・ソサエティの生産様式による富の増加²¹⁾」を認めなが

18) ギデンズ説については福田〔11〕および福田〔14〕を参照されたい。

19) 野尻〔20〕, 福田〔12〕

20) Bellah, et al.〔1〕 pp. 7, 297-299

21) Lippmann〔18〕 p.165

ら、他方ではそれがもたらしたヒューマン・コストつまりコミュニティの破壊、恐慌の周期的発生、それに伴う失業の大量現象化、貧富の格差の増大、さらには集産主義の台頭などにも注意を向けた。ヒューマン・コストを考えると、グレート・ソサエティは暮らしやすい社会とは言い切れないというのがリップマンの診断であった。彼のグッド・ソサエティ論はヒューマン・コストの克服の方向を示そうとする処方箋だったのである。

ヒューマン・コストをもたらした原因は何か。リップマンはその究極の原因をリベラリズムの怠慢に見た。リベラリズムは本来いっさいの恣意に対する異議申し立てのドクトリンであり、あらゆる恣意的パワーを悪と見、それを放逐する強い人間精神に期待をかける思想である。²²⁾それゆえリベラリズムは「静寂主義でもなく、弱い政府でもない…その勢力旺盛な時代にはいつも抑圧に対して反逆し、警察の介入や収奪に抵抗する決断であった」²³⁾。それは近代市民革命の中で鍛え上げられ、社会革命や政治革命や産業技術革命をリードしたのである。ところがリベラリズムは経済の領域でボタンを掛け違えた。レッセ・フェールをシステム原理にしてしまったのである。経済の領域から国家が退場してしまい、無政府的自由競争の中でヒューマン・コストが日増しに増大した。

ヒューマン・コストの中でリップマンが特に注意を向けたのは集産主義の台頭であった。「1848年から1870年の間に西方社会の知的風土が変わり始めた。この期間のある時点で集産主義運動の知的支配が始動した」²⁴⁾。反資本主義を標榜した社会主義および共産主義運動の台頭である。この動きは20世紀になると勢いを増し、ロシアではボルシェヴィズムの共産主義が成立し、他方イタリアとドイツではファシズムとナチズムという右の集産主義が出現した。また、アメリカでは1930年代のローズヴェルト時代に集産主義の一種であるニューディールが始まった。リップマンによれば、このような集産主義の跳梁を招いたのは、結局はリベラリズムがレッセ・フェールに胡坐をかき、現実によって突きつけ

22) Lippmann [18] p.355

23) Lippmann [18] p.355

24) Lippmann [18] p.46

られたヒューマン・コストの解決という要請から目をそむけたからであり、恣意的パワーに抵抗し、危機的状況を逞しく乗り越えるというリベラリズム本来の知的営為を怠ったからであった。²⁵⁾

リップマンの主張を読み解くと、レッセ・フェールが集産主義を招いたということになるが、これに関して想起されるのはドイツ新自由主義の「レッセ・フェールのパラドックス」²⁶⁾の考えである。このコンセプトは筆者の造語であるが、その意味は「自由放任は返って不自由をもたらす」ということである。オイケンやレプケは、自由放任によって大が小を、強が弱を駆逐する私的集中化（独占・寡占支配）が進行し、それとともに発生した社会問題を解決すべく実施された場当たりの干渉主義の経済政策は統制スパイラルを誘発し、最終的には国家専制の集産主義を招いた、と捉えた。筆者の理解では集産主義の原因論に関してリップマンとドイツ新自由主義者の間には、説明のロジックに若干の違いはあるものの、見解の一致が見られる。

リップマンの言うグッド・ソサエティとは何か。一言で述べると、レッセ・フェール資本主義と集産主義を超克しようとする第三の道であった。レッセ・フェール資本主義を退けた主たる理由は、それがヒューマン・コストをもたらしたことと、集産主義を招来したことであった。リップマンはレッセ・フェール資本主義と因果の関係にある集産主義を二種類に分けた。絶対的集産主義（または指令経済）と自由集産主義（または補償経済）²⁷⁾である。前者は左右の集産主義、つまり共産主義とファシズムである。リップマンはこのような集産主義を否定したが、その主たる理由は次の三つであった。²⁸⁾第一は、言うまでもなく自由が抑圧されることである。第二は、絶対的集産主義とグレート・ソサエティは両立しえないことである。つまり、中央管理の経済運営は本来社会関係が比較的単純な前近代社会に適合したシステムであり、分業の発達した複雑な相互依存の近代社会

25) Lippmann [18] pp.208,355,小西 [16] pp.68-69

26) これについては福田 [9] pp.31-32を参照されたい。

27) Lippmann [17] p.38

28) Lippmann [17] p.40, Lippmann [18] pp.35,210,234

と両立しえないのである。第三は、グレート・ソサエティにおける経済運営は国家に委ねられるが、一つの経済センターによって複雑な相互依存の関係にある経済プロセスを合理的に管理するのは不可能ということである。

自由集産主義についてはどうか。リップマンによればそれは第一次世界大戦後に「主として英語圏の国々に登場した、レッセ・フェールでもなく、共産主義でもなく、ファシズムでもない社会統制の方法」²⁹⁾である。国家が国民の生活水準と経済システムを操作するがゆえに集産主義であり、私的取引の自由が広範囲に認められるがゆえに自由であるような統制方法である。政治に着目すると議会制民主主義に立脚した集産主義である。ローズヴェルト時代におけるニューディール政策や社会民主主義がその代表であると言う。このような自由集産主義は議会制民主主義にとって不可避の利益集団支配を免れることができない。政府は利益集団の手玉に取られ、権威の失墜した弱い政府に転落する。こうしてその経済政策は有力な利益集団の圧力を受けて無定見かつ場当たりのとなるが、そのようなことを積み重ねてゆくとやがては絶対的集産主義に至るであろう³⁰⁾というのがリップマンの見立てであった。かくて自由集産主義の道も退けられた。

このようなリップマンの見解はドイツ新自由主義者の口吻を彷彿させる。ドイツのネオリベラルたちもまた、ワイマール時代のドイツにおいて同じ思いを抱いていたのである。たとえばオイケン³¹⁾は当時の国家を経済への干渉を常態化した経済国家 (Wirtschaftsstaat)³²⁾と捉え、その本質は弱い国家であると見た。利益集団によって操作される権威の失墜した国家である。その国家は利益集団の圧力のもとで市場プロセスへの場当たりの干渉を繰り返し、その結果として統制が統制を呼ぶという統制スパイラルを誘発して公的集中化を加速させ、ナチズムへの道を開いたと捉えた。

こうしてリップマンはレッセ・フェール体制でもなく、集産主義でもない第

29) Lippmann [17] pp.45-46

30) Lippmann [17] p.76, Part Three (pp.74-114), Lippmann [18] p.235, Chap.VII (pp.106-130), 小西 [16] pp.70-74

31) Eucken [5] S.10,13

32) Eucken [4] S.188-189, 325-327, 邦訳pp. 254, 442, 456, Eucken [5] S.13-14

三の道に方位を定める。第三の道とは何か。それについてリップマンは具体像を描こうとしたのではなく、むしろ禁欲の態度をとった。「グッド・ソサエティは建築デザインをもたない。ブループリントはない。人間生活が形成されるべき鑄型はない。実際、そのような鑄型のブループリントを期待することは、リベラル気質が抗議してやまない思考モードである³³⁾」という理由からであった。

ハイエク (F.A.v.Hayek) の言う設計主義の否定である。アングロサクソン・リベラリズムに伝統的な思考スタイルであり、設計主義に立つドイツのネオリベラリズムと好対照を成す。

と言ってもリップマンは第三の道について何も語らなかったのではなく、そのシステム原理や進むべき方向について、断片的ではあるが、言葉を残している。第三の道の基本原理は次の文章に集約されている。「新しい社会原理は個人的イニシアティブと集団のイニシアティブをともに認める…両者は相補う。これが自由の方法なのである。政府当局は秩序ある生活を保証すべく国民を支援する。国家は強力であるにしても国民の主人ではなく、国民のサーヴァントに留まる³⁴⁾」。これは要するに、カトリック社会論の言葉を使うと、補完性原理 (subsidiarity principle)³⁵⁾ である。社会経済生活の主人公は個人であるが、個人で解決しえない社会問題の解決は政府に委ねられ、そのことを通して政府は個人の生活を支援し補完するという「上から下への支援³⁶⁾」の考えである。リップマンは補完性原理に立って、社会経済システムの構成原理として第一に個人がプレーヤーになりうる市場経済を、第二に市場経済に対して補完的政策を行う政府をもつてく³⁷⁾る。いわゆる混合経済であるが、これはレッセ・フェール体制および集産主義³⁸⁾の負の経験から導き出された解決策であったことは言うまでもない。この場合

33) Lippmann [18] p.364

34) Lippmann [17] p.60

35) 補完性のコンセプトが登場したのはローマ教皇ピオ11世が1931年に出した社会回勅“*Quadragesimo anno*”においてであった。

36) Rauscher [22] 邦訳p.8

37) Lippmann [18] p174

38) Lippmann [18] pp.232-240

ポイントになるのは政府であるが、それは弱い政府ではない。リップマンが想定するのは、ドイツのネオリベラルと同様に、利益集団からの圧力を撥ねのける力をもつ権威を回復した強い政府である。もちろんデモクラシーに立脚した政府である。

では政府の権威はどのようにして回復されるのか。リップマンは「より高次の法」(higher law)³⁹⁾に期待をかけていたように思われる。その内容はいまひとつ判然としないが、リップマンの第二次世界大戦後の公共哲学的考察から推測するに、人間および事物の本性に根ざす自然法を視野に入れていたようである。⁴⁰⁾自然法に裏打ちされた実定法体系による統治を通して権威を回復した政府が、自立的に上からの支援を行う、そういう世界が想定されていたと思うが、どうだろうか。

V バーリーナーのグッド・ソサエティの経済学

バーリーナーは1999年に“*The Economics of the Good Society, Variety of Economic Arrangements*” (Malden/Oxford) を出版した。この書名にあるように本書はグッド・ソサエティに関する経済学である。つまり、経済分野に考察を限定し、グッド・ソサエティにふさわしい経済システムを尋ねようとするものである。ただ、本書では著者が、リップマンのように、全編を通して自説を展開するのではなく、テーマに関わる諸問題(市場と計画, 所有, 分配, 交換, 雇用など)について事項別に概説し、コメントをつけるという教科書的な形式が採られている。たしかにバーリーナーは自説を述べているのだが、しかしそれはコメントの中で断片的に示唆されるに留まっている。本書は自己主張の書ではない。その特色はむしろグッド・ソサエティのテーマへ経済学サイドから接近するにさいして採るべき方法論を述べているところにある。以下、この点に関する重要事項について見ておこう。

39) Lippmann [18] pp.344-351, Bellah, et al. [1] p.279

40) 小西 [16] pp.79-82

バーリーナーによればグッド・ソサエティは理想社会（ideal society）ではない。⁴¹⁾ 空想で描かれるユートピアではなく、現実とのかかわりの中で構想される現実型である。それを研究するには実証的方法と理論的方法を併用しなければならない。つまり、一方で現存の経済システムおよびそれを構成する経済制度を実証的に比較考察し、他方で現代経済理論を応用しなければならないと言う。後者についてバーリーナーが重視するのは厚生経済学と経済制度に関わる経済学——たとえばエージェンシー・コスト論、所有権の経済学など——である。⁴²⁾ ただ、バーリーナーはそのような理論を駆使して経済制度を体系的に分析しているわけではなく、単に指摘するに留まっている。

ある経済制度が、したがって経済制度の集合である経済システムが、グッドかどうかを判定するには比較の方法によるしかない。‘better or worse’の判断である。バーリーナーはこの点について次のように言う。「ある経済制度の配置が他のものよりもベターであることを確定することは価値判断を下すことである」⁴³⁾。とすればどのような価値基準を置くかがポイントとなる。バーリーナーが選択したのは次の五つの価値である。⁴⁴⁾ 正義（公正，平等），安全（雇用保証，所得保証），生産主権（プロダクト・ミックス，意思決定の主体），選択（消費選択，職業選択），効率（資源配分効率）である。これらはいずれも経済学の伝統の中で重視されてきたものばかりである。バーリーナーはこれらの価値を基準に置いて種々の経済制度の優劣判定を試みている。この点にバーリーナー説の特色がよく出ているが、五つの価値は望ましい経済システムを描き出すには有効かつ有用な基準となろう。

VI おわりに

グッド・ソサエティ論はもともと経済ばかりでなく政治，法，社会（たとえばコミュニティ，家族，階級，民族など），道徳，教育，宗教，環境，グローバリゼー

41) Berliner [2] p.13

42) Berliner [2] p.14

43) Berliner [2] p.19

44) Berliner [2] pp.22-31

ションなどを研究対象とする間口の広い学際的な学問である。リップマンのグッド・ソサエティ論は主として政治、法および経済を対象にしたものであったし、1991年にベラーらによって出版された“*The Good Society*” (New York) はそれらに加えて社会、道德、宗教、環境、国際関係などを対象にして社会学および公共哲学の角度から時代に適したグッド・ソサエティを探ろうとするものであった。また、ガルブレイス (J.K.Galbraith) が1996年に出した“*The Good Society: The Humane Agenda*” (New York) もアメリカン・リベラリズムの立場から経済を軸にしながらベラーらとほぼ同じような諸領域を考察し、21世紀を見据えたグッド・ソサエティを提案しようとした。⁴⁵⁾ただ、ベラーらの著書にしても、ガルブレイスの著書にしても、考察範囲を広げすぎたためか、まとまりに欠け、また肝心のグッド・ソサエティの輪郭および内容を明確にしえないままに終わっている。両書を本稿で取り上げなかったゆえんである。

アメリカのグッド・ソサエティ論が比較的広範な領域を対象としているのに対し、ドイツ生まれの第三の道論は総じて経済中心の議論である。もちろん例外はある。レプケ説とギデンズ説である。両者は経済、国家、社会（コミュニティ、家族、宗教など）を視野に入れ、それぞれ輪郭および内容ともに明確な「経済ヒューマニズム」と「第三の道」を設計した。⁴⁶⁾

リップマンのグッド・ソサエティ論は、筆者の専門とする社会経済システム論の立場から見て、第三の道論に匹敵する内容を誇っている。彼の説はドイツ新自由主義の第三の道論と似通うことはすでに指摘したところではあるが、この点についてももう少し補足しておこう。筆者が理解した限りでは、リップマン説はめざすべき経済システムの点でとりわけオイケン説と重なり合う。両説とも法治を重視し、強い政府による法制度改革や法政策によって経済システムを

45) Galbraith [15].ガルブレイスはグッド・ソサエティを完璧な社会ではなく、実現可能な社会と捉え、そこにおいてすべての国民が個人の自由、基本的福祉、人種的・民族的な平等、価値ある人生を追求するチャンスを享受できる社会と規定している。ちなみに邦語で書かれたグッド・ソサエティ論には東條[24]がある。東條教授は市民社会論を視座に置き、市場経済・民主主義・福祉社会の統合形態としての新しい市民社会を展望している。

46) レプケ説およびギデンズ説については福田[10]、福田[11]を参照されたい。

⁴⁷⁾誘導する道を提案した。誘導経済システムである。ただ、オイケンがその内容を「競争秩序」の形で設計したのに対し、リップマンは設計を避けたという違いはある。オイケンドイツ理想主義の流れを汲む設計主義の立場をとり、レブケやリュストウらも同様であったが、リップマンはイギリス経験論の系譜を引く非設計主義の立場をとったのである。そのような違いはあるにせよ、オイケンもレブケもリュストウも、そしてリップマンもレッセ・フェール資本主義と集産主義を超越する第三の道を構築することによって欧米近代の時代精神であるリベラリズムの再生を図ろうとしたことは間違いのないところである。

このように見てくると第三の道論もグッド・ソサエティ論も、少なくとも社会経済システムの議論に関する限り、大差ないことが分かるであろう。いずれも時代の要請に応じてよりよい道を提案しようとする未来志向の議論なのである。

参考文献

- [1] Bellah, R.N., R.Madsen, W.M.Sullivan, A.Swidler, S.M.Tipton, *The Good Society*, New York, 1991.
- [2] Berliner, J.S., *The Economics of the Good Society, Variety of Economic Arrangements*, Malden/Oxford, 1999.
- [3] Csikós-Nagy, B., *Sozialistische Marktwirtschaft*, Wien, 1988.
- [4] Eucken, W., *Grundsätze der Wirtschaftspolitik*, 4. Aufl., Tübingen/Zürich, 1968.
大野忠男訳『経済政策原理』勁草書房, 1967年。
- [5] Eucken, W., Staatliche Strukturwandlungen und die Krisis des Kapitalismus ?, in ORDO, Bd.48, 1997, S.5-24.
- [6] 福田敏浩『現代の経済体制論』晃洋書房, 1990年。
- [7] 福田敏浩『移行経済の研究—理論と戦略—』滋賀大学経済学部研究叢書, 滋賀大学経済学部, 1997年。
- [8] 福田敏浩『体制移行の経済学—理論と政策—』晃洋書房, 2001年。
- [9] 福田敏浩「ドイツ新自由主義の第3の道—レッセ・フェールと集産主義を超えて—(1)」『彦根論叢』第333号, 2001年, pp.25-41。
- [10] 福田敏浩「ドイツ新自由主義の第3の道—レッセ・フェールと集産主義を超えて—(2)」『彦根論叢』第335号, 2002年, pp.1-28。

47) オイケン説については福田 [10] を参照されたい。

- [11] 福田敏浩「「第3の道」の時代—グッド・ソサエティを求めて—」『彦根論叢』第337号, 2002年, pp.1-24.
- [12] 福田敏浩「新しい社会経済体制を求めて—第3の道の設計枠組み—」『京都学園大学経済学部論集』第12巻, 第2号, 2002年, pp.29-52.
- [13] 福田敏浩「ドイツ社会主義の第三の道—オッペンハイマー, ハイマン, リッチェル—」『彦根論叢』第344・345号, 2003年, pp.47-63.
- [14] 福田敏浩「新しい社会経済システムを求めて—第三の道論の系譜—」経済社会学会編『経済社会学会年報』XXXI, 2004年, pp.4-13.
- [15] Galbraith, J.K., *The Good Society, The Humane Agenda*, New York, 1996.
堺屋太一監訳『よい世の中』日本能率協会マネジメントセンター, 1998年.
- [16] 小西中和「W.リップマンのリベラル・デモクラシー論」田口富久治, 中谷義和編『現代政治の理論と思想』青木書店, 1994年, pp.63-87.
- [17] Lippmann, W., *The Method of Freedom*, London, 1934.
- [18] Lippmann, W., *The Good Society*, London, 1937.
- [19] Lüdders, M., *Die Suche nach einem Dritten Weg, Beiträge der deutschen Nationalökonomie in der Zeit der Weimarer Republik*, Frankfurt a.M., 2003.
- [20] 野尻武敏『第三の道—経済社会体制の方位—』晃洋書房, 1997年.
- [21] Nuti, D.M., Market Socialism: The model that might have been—but never was, in Aslund, A.(ed.), *Market Socialism or the Restoration of Capitalism?*, Cambridge, 1992, pp.17-31.
- [22] Rauscher, A., *Kirchliche Soziallehre, in Handwörterbuch der Wirtschaftswissenschaft*, Bd. 7, 1977, S.41-51. 桜井健吾訳「キリスト教社会論」『社会と倫理』第8号, 南山大学社会倫理研究所, 2000年, pp.1-15.
- [23] Rüstow, A., Freie Wirtschaft-Starker Staat, in Boese, F. (Hrsg.), *Deutschland und die Weltkrise, Schriften des Vereins für Socialpolitik*, Bd.187, 1932, S.62-69.
- [24] 東條隆進『よい社会とは何か』成文堂, 2004年.

〔付記〕早稲田大学の東條隆進教授および滋賀大学の小西中和教授からグッド・ソサエティに関する資料を提供して頂いた。ここに記して両先生に感謝の意を表したい。